講 義 4

オンパクを創ろう!
～企画書作成ワークショップ～

［講師（コメンテーター）］

NPO法人ハットウ・オンパク 運営室長　野上 泰生 氏

信州諏訪温泉泊覧会「ズーラ」実行委員会 運営委員長　北澤 勝己 氏

能登旨美オンパクうまみん実行委員会 事務局長　森山 奈美 氏

一般社団法人ジャパン・オンパク 代表理事　鶴田 浩一郎 氏

【進行】

公益財団法人日本交通公社 観光政策研究部 主席研究員　吉澤 清良

初日の講義と班別での意見交換を踏まえて各自のオンパク企画をブラッシュアップ。企画提案の発表、講師からのコメント等、双方向のやりとりを通じて、自地域でのオンパク実施を強くイメージし、オンパクへの理解をさらに深める。

【吉澤】 では、ワークショップを始めたいと思います。この講義を受ける前に、皆さんには自分たちの住む地域、あるいは行政の方は勤務先の地域を想定して「オンパクを創ろう!」というワークシートにご記入いただきました。こちらをたたき台として進めたいと思います。

皆さんのお手元には、ワークシートをコピーしてお手元に配布しています。今日、これまでの野上さんや鶴田さんのお話を聞いて「オンパクは自分が考えていたものとはちょっと違う」などの気づきがあったのではないでしょうか。

まず、それぞれのワークシートを見直していただき、グループの中で共有してください。6つの班に分かれていますが、代表者を班ごとに決めていただき、オンパクの企画を各グループから一つずつ発表していただきたいと思います。

では修正作業に入る前に、注意してほしいポイントを、講師の野上さんからお話しいただきたいと思います。

「失敗パターン」には共通点がある

【野上】 私たちがジャパンオンパクで初級研修を行うとき、「オンパクを知る・作る・体験する」という1泊研修を行います。「知る」というのは、先ほどの講義で私や鶴田さんが話したような内容です。

「体験する」というのは、実際にオンパクのプログラムを体験するというもので、今回はちょっと無理ですが、このワークショップでやっていただくのが「作る」という部分です。既に皆さんにはワークシートに記入していただいていますが、実際にオンパクを立ち上げるという想定で、どんなオンパクをそれぞれの地域でやりたいか具体的に考えてみる作業ですね。

僕らが分かること、はっきりしているのは失敗しそうなことです。「これをやったら成功する」というのはいろんなケースがあり、それぞれの地域によって違う部分が大きいのですが、「これをやると失敗する」というのはある種普遍的で共通しているので、経験から分かります。僕らはノウハウとしてそれを伝えています。これから話を聞いて、失敗しそうなパターンだと思ったら、ワークシートに修正を入れて、完成度を高めていただきたいと思います。

オンパクを創ろう！ ワークシート

1 あなたの地域の魅力は？

2 オンパクを行う目的は？

3 参加者層のイメージは？

4 中核となる人材は？

5 連携先（パートナー）を考えよう！

6 連携先（スポンサー＆メディア）は？

7 開催概要を考えましょう！

8 全体コンセプトは？

9 オンパクの名称を！

※2月17日（月）までに、日本交通公社　吉澤　あてにお送りください。

最初の2項目、「①あなたの地域の魅力は?」と「②オンパクを行う目的は?」は、その地域の人が決めることなので、これらに対して我々があれこれ言うことはありません。

重要なのが、「③参加者層のイメージは?」です。確実に失敗する例が、この欄に「観光客」と書くことです。これまでの講義でもお分かりだと思いますが、オンパクにいき

なり観光客を呼び込むのは現状では無理です。参加者層は地域住民が基本で、どんな人を呼びたいかを考えてください。

さらに重要なのは、「④中核となる人材は?」の項目です。我々はよくキャスティングと言いますが、よく失敗するのは、最初から立派な組織を作るパターンです。なんとか事務局長とか、地域の偉い人がずらーっと入っている組織ですね。そこに決定権を委ねてしまうと、まず失敗します。仕方なく仮にそういう組織を作ったとしても、意志決定は数人の本当にやる気がある人たちで行えるような形を別に作っておくべきです。その部分をどこかに委ねた瞬間に、物事が進まなくなります。

中核となるべきはオンパクをやりたくて仕方がない人です。それは皆さんご本人かもしれないし、地域に既にいる人かもしれません。熱量のある人、そしてできればあまり先々のことを考えない人の方がいいです（笑）。あんまり先のことを考えると、普通オンパクなんてやれないです。地域づくりや地域活動って本当にそうで、自分の生活とか将来を考えていくと、今の社会でできるわけがないです。そこを突破できる人が必要です。

リーダーとなる人は、物事を一人でできる人、器用貧乏な人はダメです。むしろ何もできない方がいい（笑）。情熱だけあって、あとは何をやっていいか分かんないみたいな「穴だらけ」の人がいいんです。過去にその人が関わったイベントがすごく生き生きしたものだったりすると、絶対いけると思います。

穴だらけの人がなぜいいかというと、そういう人の周りには穴を埋める人が集まるんです。推進力だけあってあとは穴だらけの人を中核に置くと、その周りにネットができる人、資金調達ができる人、地域のお偉いさんと話がつけられる人、企画力がある人など、いろんな知恵がある人が集まってくる。そういう組織ができれば最高ですね。ここはそういう人たちだけで考えてください。

さっき鶴田さんが言ったように、同じような人でなく、それぞれ役割がある人を集めると。人数はあまり多くなくてもいいです。ただ、メインのマーケットが女性なので、プログラムの企画を考える人は女性が望ましいと思います。男が作ると、ダジャレとか変なプログラムばっかりになっちゃうんです（笑）。楽しいけど、質はちょっと落ちるんですね。

ちなみに中核の人材は行政マンもできます。実際にやっている人もいるので、自分がやるというのもありです。行政マンの役割としては、資金調達でのサポートやネットワーク力を使ったサポート、申請などのドキュメンテーションのサポートもあると思います。

やはり重要なのが、「⑤連携先（パートナー）を考えよう!」です。最初にオンパクをやるときは、僕らは大体30人を仲間と一緒にピックアップしています。その30人は地域で何か面白いことをやっている人や、最近変わったことをやっている人、怪しげな活動をしている人などです。起業を考えている女性の個人やグループ、老舗の若旦那、男なら年配でちょっとマニアックな人、ビジネスには全然ならないけど話題性があるとか。こういう人たちが、参加を働きかけるパートナー候補です。

ここでやっちゃいけないのは「割り振り」です。観光協会からは何プログラム、旅館組合から何プログラム出してください、みたいな。それをやった瞬間につまんないプログラムが出てきます。しかもお願いした手前上、断れないんですよね。だから、最初は思い切りわがままに自分たちが参加してほしい人たちを、一生懸命頑張って30人くらいリストアップしてください。その候補者に説得に行くわけですが、そうすると大体20人くらい残ると思います。その人たちを核にしてやっていくと、最終的には少し増えて30人くらいになるというイメージですね。

ですから、この連携先はあまり広げずこだわってください。商店街から何人選んだから、旅館からも何人とか、変にバランスを取らない方がいいです。本気で前のめりになってやっている人たちをとにかく集めると。そうやってできたオンパクには、やはり似たような人たちが集まります。ですから、できるだけここはこだわってください。

重要なのは中核的に一緒にやる仲間、最初に働きかけるパートナーの2つです。これらがしっかり考

えられていれば、あとは正直どうでもよくて、好きにやればいいんです（笑）。

【吉澤】 さて、今日はオンパクに携わっている方々が多数いらっしゃっていますので、ご紹介します。まず、明日の講義6で講師として登場いただく北澤さんと森山さんです。

【北澤】 長野県の諏訪地方から来ました。ズーラ実行委員会でオンパクをやっています。役場の人間なので、行政マンの立場が分かるつもりです。

【森山】 石川県の能登地方からやってまいりました。能登のオンパク「うまみん」の事務局をやっています。うまみんは講義3の鶴田さんの組織の表で一番自立性が高いところにプロットされていましたが、スタート時からかなり変遷しています。一番最初の実行委員長は七尾市長でした。そこからどうやって今に至ったかは明日お話しいたしますが、今日は皆さんとの交流を楽しみにしております。

【吉澤】 そして、オンパクは全国にどんどん拡大していますが、石見の伊藤さんお願いします。

【伊藤】 島根県西部の石見地域からやってきました伊藤です。僕は2年前に東京から故郷の島根にUターンしてオンパクを始め、昨年までに「いわみん」という石見地域のオンパクを2回開催しました。自分のやったことの振り返りを含めて、勉強させていただきたいと思います。

【吉澤】 オンパクは人材育成にも役立っているということで、もうお一人、佐々木さんをご紹介したいと思います。

【佐々木】 今、大学2年生で能登のオンパク「うまみん」でインターンをさせていただいています。森山さんの元でうまみんをどうやって地域の人に広めるかということを学んでいます。今日は皆さんのお話を聞いて、うまみんをより良いものにしていく勉強をしたいと思っています。

【吉澤】 では、こうした方々の力も得てワークショップを進めたいと思います。これから、40分間を使ってご自身のワークシートの修正、班での共有と発表者の決定を進めてください。

『各班の発表と講師コメント』

1 山口県宇部市

既にオンパクが開催されている宇部市。うべ探検博覧会、通称「うべたん」は2014年度（平成26年度）で5年目を迎える。発表者は市役所職員の方で、「宇部の奥地でココロ・カラダの若返り」をコンセプトに中山間地域の振興を図りたいとのこと。イメージする参加者層は宇部市と近隣市在住の20～50代女性。中核となる人材には地元NPO法人のスタッフを挙げた。連携先は農家民泊の経営者、米でお菓子作りをする農村の主婦グループ、歴史案内人グループや農家レストラン、古民家カフェなどの名前が挙がった。

＜講師コメント＞

【吉澤】 既に開催されているということですが、講義を聞いて修正したところはありますか。

【発表者】 「宇部の奥地でココロ・カラダの若返り」という全体コンセプトだけを考えていましたが、パートナーを具体的に考えるに当たり、中山間地域に詳しい方を追加しました。

【野上】 宇部市観光課の方が、別府のオンパクに視察に来たんですね。当時の彼は全く何をしていいか分からず、ただ「1000万円あります」と。こんな無目的な公務員がいるのか、失敗する全ての要素をそろえていると驚きました（笑）。

でもその後にオンパクやると決めてから、すごく偉いと思ったのは、オンパクを既にやっていた全地域の人たちに電話して、しつこく1時間くらいいろいろ

聞きまくったらしいんです。おそらく迷惑もかなりかけたんだろうと思いますが、愛すべき人でオンパクをやって一皮むけました。行動様式が変わって、異質な公務員になりました（笑）。今はどんどんいろんなものに参加していて、新しい局面を切り開く人材になったのではと思います。

Yasuo Nogami

あと、中核人材に「NPO法人うべネットワーク」の方が登場したのも大きいですね。この方が、いいコーディネーター役を務めています。（野上氏はここで、次の予定があるため退席）

【森山】 私は今朝、築地にある「ブッチーネ」という宇部市のアンテナショップに行ってきました。商品開発の勉強会からこの店が生まれたと聞いていますが、新しい商品を生み出すチャレンジとオンパクのプログラムはすごく親和性が高いんですね。オンパクでチャレンジして、できた商品をブッチーネで売るという流れができると、チャレンジの場としてもいいですし、行政の手から離れた後のお金の流れも作れると思いますので、視野に入れていただければと思います。

2 兵庫県姫路市

発表者は市役所職員の方で、一番有名なのはやはり姫路城とのこと。当初の目的は「姫路城を中心に観光の魅力を発信して、他地域からの誘客を図る」としていましたが、講義を聞いて「姫路城以外の魅力や資源を市民に知ってもらって、好きになってもらう」と書き換えた。また、2006年（平成18年）に瀬戸内海の家島（いえしま）諸島と合併したので、今までにない新しい資源ということで、地元の人にもっと知ってもらいたいと連携先などを新たに書き加えた。

中核人材には発表者自身が信頼できて「むちゃくちゃする人」や「どこでも飛んでいく人」、具体的には姫路市でB-1グランプリの誘致に携わった人などが挙げられた。

＜講師コメント＞

【北澤】 私のような長野県人から見ると、姫路市には姫路城というすごいキラーコンテンツがあり、今は何と言っても大河ドラマの『軍師官兵衛』だと思います。オンパクに限らず何かイベントを始めるときって、タイミングがすごく重要だと思います。行政がお金を出すタイミング、地域の人が関わり始めるタイミングなどですね。

Katsumi Kitazawa

大河ドラマはそういういいチャンスなのではないかと思います。我々の地域にも「御柱祭（おんばしらまつり）」という大きな祭りがありますが、そういうキラーコンテンツを生かすためにオンパクがあるという側面もあります。いろんな人を巻き込んで始めるいいタイミングが、今なのではと思います。

【森山】『軍師官兵衛』が放映されているのに、連携先のメディアのところにNHKが入っていないのはなぜかなと。

【発表者】 あえて外しました（笑）。地元意識を強めるということで。

【森山】 なるほど。でもNHKの地方局は使えるのでは。タイミングの話がありましたが、盛り上げるときにメディアのうまい使い方があると思いますし、官兵衛について地元の人がガイドするプログラムなども今やった方が作りやすいかと。

うちの地元の七尾市でいうと日本画家の長谷川等伯没後400年というのがまさにそのパターンで、地域出身の誰かの生誕何年とか大河ドラマの放映などは、テーマを決めやすいんですね。その年はそのテーマ一色でいろんなプログラムを作るというやり方もありかなと。

Nami Moriyama

【北澤】 費用対効果ってよく言われますが、メディア露出効果というのがあって、NHKは行政内部での説明にも使えるかなと。100万円で2億円のプロモーションができた、とか。

【鶴田】 観光客数が間違いなく伸びるのが、新幹線開通と大河ドラマの放送なんですね。大河ドラマは視聴率が低くても、その年は基本的に伸びると。姫路には宿泊施設がそうたくさんあるとは思えないので、メインは日帰り観光なのかなと思いますが。

大河放映の翌年以降はそれ以上の数字にはならないんですが、長崎だけは例外でした。それは、もともとまち歩きプログラムの「さるく」があったから、『龍馬伝』以降も客足が伸びたと。

長崎のように事前に何かをやっておくと、大河ドラマによる相乗効果が出て、その後も急激に落ちずに軟着陸できます。今からでもいいから早めに何か手を打っておくといいですね。久留米では新幹線が来るまでに、3年間かけて予算も相当かけてオンパクをやっていました。そういうタイミングを逃さず始めるというのは極めてやりやすいし、成果も必ず見えてくると思います。

3 福井県坂井市

名勝地、東尋坊がある坂井市。発表者は市役所職員の方で、オンパクを行う目的は地域の活性化。「4つの町が合併したが、一体感をさらに強める、一つのきっかけになれば」とのこと。参加者層は地元の家族連れで、地元を好きになって将来は戻ってもらえるようにと子供をメインに考えました。中核人材はB-1グランプリの参加グループなどで、地元の観光連盟で提供しているプログラムをオンパクでも開催したいとのこと。子供連れを意識しているので、開催期間は夏休み中の8月後半とした。

＜講師コメント＞

【吉澤】 同じ北陸ということで能登の森山さん、いかがでしょう。広域の取り組みについてのアドバイスなどもいただければ。

【森山】「地域の活性化に結びつけたい」とあります。この言葉は便利なので、非常によく使われますが、お金がもうかったら活性化なのか、人が来たら活性化なのか。他のチームにも言えることですが、オンパクをやることで地域が活性化するとはどういう状態なのかを具体的に考えておいた方がいいと思います。

参加者層を家族連れにしたのはとてもいいなと思いました。でも、既に体験プログラムをやっている組織をパートナーに選んでいるのはちょっと危険な匂

いがしました。その中でどの人に話をするか、具体的な人をイメージしてほしいのと、既にやっているからこそチャレンジの要素を必ず入れていただきたいと思いました。

【北澤】 坂井市の近くのあわら市は既にオンパクをやっていますよね。僕もご縁があって10回くらい足を運びました。そこの事務局長が坂井市の方でしたが、あわら市と一緒にやったらどうですか?というのがまず率直な意見です。

夏休みの終わり頃に開催したいということですが、夏はもう観光客が飽和している状態だと思うんですね。お客さんが落ち込む時期に何ができるかと、タイミングを逆算して考えた方がいいし、事業者にとってもその方が有益ではないかと思います。坂井市の観光全体のベクトルの中で、オンパクが何を埋めるのかを考えた方が分かりやすいと思います。

【鶴田】 市町村合併したところは何年経ってもなかなかエリアのまとまりが悪く、共通のコンセプトを打ち出すのはほとんど不可能に近くて、無理やり一緒にやろうと思っても結果が良くないんですね。

エリアブランドを磨くという意味で、オンパクでもある程度テーマを絞ることが必要ですが、市町村合併したところは共通のテーマがなかなか見つからないと。では他の地域はどうしているかというと、例えば市町村合併で九州でも面積が広くなった延岡市のオンパクは、基本的に海側の文化圏だけでやっています。

別府の場合、「別府八湯(はっとう)」という各地域を串刺しする言葉があったので、一緒にできましたが、もともと8つの地域の個性が全部違うので独立運動もありました。もともとバラバラな文化だと、最初から一つの観光施策でまとめて売っていくのは無理でしょう。それより各エリアでやっていって、それぞれの組織を串刺しして、後から一つにまとめる方が全体でうまくいくと思います。

4 宮城県仙台市

発表者は地元のNPO団体メンバー。仙台市内を流れる広瀬川に着目した企画を作った。「広瀬川が日常生活から少し遠い存在なので、もっと身近になるよう、流域の活性化を図りたい」とのこと。参加者層のイメージは、仙台市内のまちなかに暮らすマンション居住者で、中核人材は町内会をベースとしたまちづくりの会や、ギャラリー、大学などで構成される「地域探検隊」というグループ。連携先はまち歩きの会や市内の農園などで、来年3月に仙台で国際会議が開催されるので、それに合わせて開催したいとしている。

＜講師コメント＞

【森山】 今まで、いろんな町に行きましたが、まち歩きに参加して広瀬川の案内をしてもらったときに、「ここの地層が……」と何億年も前の歴史の話から始まったのは、ここが初めてでした。すごく感銘を受けた記憶があります。

広瀬川の流れから地球レベルで哲学的な世界が広がって、きっとそういうことを話せる人がいっぱいいるんだろうなと思いました。日本全体に影響を与えるような考え方や、新しい活動が生まれている場所だと思います。

仙台は明らかに日本で最も新住民が多い町ですよね。仙台に新たに住み始めた方たちが参加者のターゲットであり、新たなパートナーになっていく

方々なのではないかと思います。地域探検隊というグループを中核にしたのは非常にいいなと思いました。

【北澤】 地域の中の人たちに地域をもっと知ってもらうというコンセプトは、野上さんの講義に出てきた埼玉県和光市とまさに一緒です。和光市は東京に働きに出ている人たちのベッドタウンで、人口は増えているけど地域への愛着が少ないことを市役所の協働推進の担当者が悩んでいて、そのためにオンパクを一昨年から始めたそうです。地域の中でもっとお互いが知り合って、愛着を持ってもらうという目的はすごくいいと思います。

【森山】 川つながりということで、長良川オンパクをぜひロールモデルにされたらいいと思います。ここも地球レベルに近いような地域の文脈や後世に何を残したいのか、非常に深いところまで議論をして緻密（ちみつ）に設計されています。こういうブランドビジョンを地域で描く、という強い意志がオンパクの中でも特に強いので、ぜひ見ていただければ。

【鶴田】 仙台は100万都市ですから、他とはスケールが違うんですね。都市としての機能が完全に経済優先になっているはずなので、その中で観光という要素は予算的にもとても小さいのではないかと思います。ですから、改めて観光というより、軸足は新社会づくりや、市民社会の質的向上という部分なんだろうなと。

オンパクより、まち歩きを先にやってしまうという手もありますね。100万都市で一斉にやるのは不可能なので、そういうグループを各エリアで作って始めると。

大きな都市では、経済部門の観光振興ということでオンパクを始めると、なかなかうまくいかないと思います。福岡市もそうでした。市役所でオンパクをやりたい人がいたんですが、まち歩きでさえもうまくいかなくて。その代わり、着地型商品やまちなかバルなどを始めて、うまくいってます。やり方次第ですよね。町が大きすぎる場合は、細分化してエリアごとに始めるというのがいいと思います。

5 愛知県豊田市

発表者は市役所職員の方。自動車産業で知られる豊田市は市町村合併により、愛知県で一番広い市となった。紅葉で知られる香嵐渓や徳川家発祥の地・松平郷などがある。「中心市街地や限界集落などが一緒になって約10年経つ。それらの地域の資源を市民に知ってもらい、一体感を出したい」とのこと。中核人材はまちづくり会社の女性社長、農山村の交流を行う組織の所長などで、外国籍の人も多く住んでいるので、パートナーに国際交流協会も入れた。開催期間は9月下旬～12月上旬の2カ月強としている。

＜講師コメント＞

【北澤】 2つのステップがあると思います。最終的には観光につなげたいのではないかと思いますが、最初のステップは市民が地域の中を知りましょうということだと思います。

地域資源は素材のままだと資源にならないので、まず宝を探して、次に探した宝を磨いて資源にして、それを地域の人が誇りとして、最終的に産業にする。探して、磨いて、誇って、伝えて、興す、この5つのステップがあると。宝はいっぱいあると思うので、1～2年では無理ですが、5～10年のスパンで考える覚悟を決めればできると思います。成功すれば、合併で生まれた大きな都市がお互いの地域の文化を知るいい事例にもなるのではないかと。

観光資源という言葉は人によっては嫌がる人もいるので、地域の宝という呼び方をするとよいのでは。ところで漢字の「豊田」と平仮名の「とよた」では、何か使い分けをされているのでしょうか。

【発表者】 豊田は合併前の旧エリアを指します。平仮名は合併後の広域を指します。

【森山】 豊田市は転勤族も多いと思うので、参加者層としてはとてもいいお客さんではないかと思います。私が地元でやっているB級グルメツアー参加者の3分の1は「この春、転勤で来ました」という人で、地元の情報を欲しているんですね。転勤族を参加者層に入れて、意識的にその層に情報が行くような工夫をされたらいいと思います。

開催期間を2カ月以上と設定していますが、これは少々長いのではないかと。理由は何でしょうか。

【発表者】 毎年9月下旬に市を挙げた「産業フェスタ」というイベントが開催され、12月上旬には都市と農山村を結ぶ「いなかとまちの文化祭」というイベントが開催されます。この両方にかけてオンパクを開催したいと。私も少し長いなとは思いましたが、プログラムを60くらいうまく分散していけば、できるかなと。

【森山】 オンパクの開催も、一つ一つのプログラムと同じでトライ＆エラーだと思うので、まず試しにやってみては。別府も今でもいろいろ試していますし、うちの地域もそうですので、まずやってみるといいと思います。

【鶴田】 愛知県は観光をやらなくても工業で保っている県ですが、5年くらい前から観光をやろうと言い出して、やっと今火がついたと。九州も工業都市が観光をやり始めましたが、そのときに最初にやったのが、市民向けのイベントでした。市民が自分の地域の良さに全く気づいていなかったので。ちょっと時間はかかりますが、とにかく市民が地域の魅力に気がつくところから始めた方がいいと思います。特にキラーコンテンツがない場合は、市民から始めるのがポイントですね。

小倉や久留米は工業都市ですが、お城があって本当に歴史が古いんですね。しかし市民はそれさえも知らないと。豊田市は徳川発祥の地ということで、まず多くの市民がそういう土地の歴史を知って誇りに思うと。これは工業都市が観光に乗り出すとき、最初のスタート地点ではないかと思います。あまり短兵急に考えず、「うちの地域は誇れる」という気持ちから人も呼べる、ビジネスチャンスもあると段階を踏んで考えた方がいいと思います。

6 埼玉県宮代町

発表者は地元NPOのメンバー。春日部市の隣に位置し、東武動物公園がある宮代町は、建築家グループ「象（ぞう）設計集団」が設計した個性的な公共建築が2つある珍しい町。その一つであるコミュニティセンター「進修館」を中心会場に、町内とその周辺在住の30～60代女性をターゲットとして、アートと美をテーマにしたオンパクを開催したいとのこと。中核となるのは「宮ガール」という、町内でさまざまな事業を営む女性たちの女子会で、まちづくりの話もよくしている。町では着地型観光に取り組み始めており、オンパク開催を通じて事業の継続にもつなげたいとしている。

＜講師コメント＞

【森山】 全部いいですね。私はもともと建築出身なので、象設計集団の建物というのにまず引かれますが、ああいうランドスケープ的な建築物をガイドされたことはないんです。もし象設計集団の建物をガイド付きで見られれば楽しさ倍増ではないかと。非常

に意図を持って設計されていて「へえ～」の数がすごいと思うので、キラーコンテンツになるのではないかと思います。

宮ガールの存在など、もともと中間支援をやっているところがあり、ネットワークを持っていて、そこからオンパクに乗り出すというのは、非常にうらやましい態勢だなと思いました。

【発表者】 うちの町にあるまちほめ学会（P23参照）には、象設計集団メンバーの富田玲子さんにも参加いただいており、進修館についてはガイドができる形になっていて、少しずつ準備しています。

【北澤】 私も聞いていて、行ってみたいなと思いました。着地型観光という言葉が出てきましたが、観光事業者がどのように関わるのか、ちょっと見えないかなと。ホテルがあるのか、飲食店があるのかよく分からないのですが、そういう人たちが受益者として関わってくる形が何かないと、継続を考えたときに少し厳しいかなと。今、やる気がある人がいるのはいいんですが、最終的な受益はどこかと聞かれたときに何か答えがないと、商工会や行政が支援を出しづらいかもしれない。今後その辺を明確にしていった方がいいのかなと。

【鶴田】 発表されたご本人がNPOで市民社会の中での役割を果たしているので、オンパクの役割についても、基本的なことがほとんど分かっている気がします。その上でオンパク開催によって地域の魅力を伝えて集客を増やすのか、住みやすい地域にするための手段にするのかですが、聞いていると、市民社会レベルでライフスタイルの質的向上の方向でいくんじゃないかなと。今のお話を聞く限り、模範解答だと思います。